

大通和座通信

YAMATOZA

日々新面目

其の二十四

安東伸元

新聞を読んでいると連日、いやしい、あさましい、いぎたない、いじましい人間たちの所業によるおぞましい出来事が報じられ暗澹憂鬱の気持ちが続きます。もうこの上は、見ざる・聞かざる・言わざるの「三猿」を真似ようかという気になつていきます。九月の島根大学における「日本音楽教育学会」の報告誌に載せる短文を求められたので、先日次のような一文を送りました。標題「古典芸能は、美しいことばの宝宝箱」へ「美しい国」という言葉が大方の関心を集めて、わが国に行く先についての国民的論議を促しているようです。そこで私も単純な理屈を一つ。国が毅然として美しくあるためには、凜とした美しい心をもった人間の存在が必ずでなければなりません。この美しい精神は、美しい言葉によって育成されます。この基本原理

を意に介しないで近代化の道を猛進してきた結果のツケが、一世紀を経た今一斉に噴き出しているようです。東洋に生まれた日本人の身体の芯（真）には漢字の文化が、生きるための熱源として仕込まれているはず。日本人にとってそうであることが自然で好ましい状態でしょう。その事に少し気づいた人間が、祖父が曾祖父が大事そうに仕舞い込んでいたモノがあつたのを思い出し、納戸から取り出した「古典伝統芸能」と付箋の付いた風呂敷包みを開けてみて、出てきたモノの面白さに驚喜しているというのが只今の状況でしょうか。さてその時、最も直接的な刺激を与えて心をとらえるモノは音楽です。そこで、音を奏でる楽器の演奏技術習得も大事ですが、それと同時にその楽器の伴奏によって謡われる言葉（日本語）をわが体内に取り込むことが、民族の生存に関わるほどの重要事であると申しあげたいのです。精神にも規範が必要であると言つことを教わらず、したがって倫理観というものを持たない人間が大量に出現して、おおよそ理解に苦しむ事件騒動を起こしています。この現象を前にすると、化学物質が原因で生体に異常を発症した生物を見て、衝撃を覚える公害事件の印象と同じ感じがします。生体の奇形だけでなく、社会環境の変化によって人間の精神的資質までが如何に変容するかという実証を

見せつけられている思いがします。テレビの報道番組を賑わす派手な社会評論家たちの巧言を集約すると、この人間変容の原因も、現象との因果関係も論議が尽くされ、対処方法も明言された感があります。ところが社会の病巣へのメスはまだ入る気配がありません。わが国の指導者たちは、相変わらず処方箋療法で間に合うと思つているようです。ごく最近、大いに引つかかる報道がありました。大相撲に関する話題です。九州場所を全勝優勝して場所を盛り上げた横綱の取り口について、横綱審議委員会の発表した苦言に不審を覚えたのです。出席委員全員の意見をまとめたという委員長の言は、「蹴手繰り」という奇襲に近い手で勝つたのは横綱の品位に欠けてよろしくないというものでした。横綱は正々堂々と受けて立つて、その上で勝たねばならぬという事でしょう。私はこの説に異論を挟む気は毛頭ありません。良識と高尚の精神を持つ者であると自認する委員の皆さんが、敢えてと言つか殊更にといつか、日本の国技「相撲道」の品格を云々し、それをわきまえず汚す者としてモンゴル出身の横綱を見せしめ的に叱責する言動に不審を覚えたのです。わが国の有識者の皆さんが言う品格などと呼べるものは、すでに社会全体の何処にもない、だから品位を感じさせる風格の力士が育つて出現することなども期待

できないと思うのに、その状況を根本的に修正する行動を起こさないと、権威を保持したいがための繕いを行うようなやり方に不快を感じるわけです。人間の素養資質などというものは、強権的に命令して身に付くわけではないでしょう。制度を作つてそれに従わせても俄には身に付かないでしょう。相撲の世界では、部屋の親方（即ち師匠）・兄弟子の教えや感化を通して、自覚や風格を備えた閑取が育つというのが本来の在り方でしょう。そしてその醸成発酵を温かく見守る愛好者や後援者が底辺をしっかりと支えるというこれまでの環境と仕組みが、実は崩れてしまつています。古典伝統芸能それぞれの現場も同じ事です。いずれも芯（真）のない張りぼて・張り子の置物になつています。その張り子の虎に権威の装いを纏わせようと必死の者たちが、由緒や伝統や格式を誇示宣伝するお札を貼り付ける体裁作りに精出しています。学識経験者・有識者・評論家などといった文化人の意向を受けてマスメディアがこの作業を一杯助けます。これが、ただ今私の目に映るわが国の古典芸術文化様相です。有形文化財の補修ならいざしらず、生身の人間が関わり、人間の心の根幹作りに重大な意味を持つ古典文化を有名無実の張りぼてのままに放置しておく国の姿勢に荷担して、権威の体裁作り工作に奉仕している人達の実

像を、この横綱審議委員会に垣間見る思いがして面白い報道でありました。叙勲を筆頭に国が与えるいろいろな褒賞を受ける該当者の人選も、おそらくこの係累に属する人たちが取り仕切つているのでしょう。この体制はわが国の権力の中枢に未だ根強く残る愚民思想によつて形成されたものです。あなた達は無知蒙昧だから思想・信条・文化・芸術・宗教など諸々について、好ましい理解と摂取の方法を規定して教えてあげようということですよ。この規定を良識と呼んで、その良識の枠内でおとなしくさえしていれば諸事安全だよと諭しているわけです。しかし、これは人格形成の上では本来余計なことですよ。いらぬお節介です。そう感じている人たちが若い層を中心に増えてきているように思えますが、まだまだ圧倒的多数は、規定された価値観からの旅立ちをしそつに見えませんか。先月大先達の尾野順一氏から、丁度書きかけていたこの稿に符合するような便りをいただきました。《最近「社会と個人（全体と個）」ということをよく考えます。言うまでもなく社会の盛衰を決定するのは、その社会に属する個人の力で、社会は只個人に活動の「場」を提供するに過ぎません。だが長い伝統を持った社会は、その社会特有の文化を育て、その文化の中心にその社会特有の基層文化（言語・価値観・思想・宗教）を作り、そ

れが逆にその社会に属する人たちに影響を与えます」という書き出しの後、大老人の説は次のように続きます。一九九〇年代、日本は政界経済界のスキャンダルが続発し、バブルの崩壊もあつて経済が停滞した（日本の失われた十年）。この経済失速の真の原因は、日本社会の自信喪失からくる自己崩壊に因ると推測できる。そして今、社会の不祥事・スキャンダルが毎日のように新聞紙上で報道される。発注側をも巻き込んだ談合、官庁・公共団体の裏金作り、高校の必修課目の非履修、イジメ、そして親子間の暴力沙汰などの問題が一挙に、しかも旧来にならぬ全国的な密度で表面化し出したのはなぜか？この点について日本通の或る外国人学者の説が興味深い。「失われた十年の間に日本の大衆は大いに変わった。従来のように事の不透明さを許さなくなり、透明性を求めるようになった。透明性は民主主義の基本である。従つて日本人は、失われた十年と云うが、経済を犠牲にしてその間に民主主義を得たのである」この説から類推されるように、確かに日本人それも若い人たちの意識は大きく変わりつつあることとは確実のようである。価値観・思想・そして道徳（日本の社会固有の道徳）の変化が、若い人を中心にしていふと思えば、いざ日本社会常識・社会通念も変わらざ

るを得ないと考えられる。現今の社会の混乱も見方によれば、変化しつつある社会の価値観・思想に既存の社会システムが適合しなくなつた結果の現象と見ることも出来る。締め括りは「要約しますと、日本の社会は確かに変わりつつある、それも若い人を中心に。いづれ社会を担う若い人が中心であるだけに、日本の文化の中核である価値観・思想・道徳なども変わらざるを得ないだろう。(この中で日本の伝統のよき部分が残されるか否かは気になるところですが、私は楽観しています。僅かですが今既にその兆候があります)今急ぐべきは、旧来の価値観・考え方に基づいて作られた諸々の社会システムを、新しい社会の価値観・思想に合わせて作り直すことである。一つの社会の基層が変わるといことは、その文化に属する全ての個人の考え方が変わるといことですから、恐らく予想外に時間がかかると存じます。私の年齢ではこの度の社会変革の結果を見届けることは出来ないと思います。でも日本は過去において現在以上の危機に度々遭遇しましたが、その都度切り抜けて参りました。今回もわが民族の伝統に培われたその底力に期待したいと思っています」八十路を半ば越えられた大老人からは大和座通信の読後感想として、これまで度々親書を頂戴して頂きました。戦後の復興期に、唸り音を立てて稼

働奮進する経済界の中心で指揮を執つて来られたご先達の言葉には、修羅場を通過した人だけが持ち、後続の者に有無を言わせぬ説得力があります。お便りの幾つかはこの欄で紹介し、また幾つかはコピーを配布し、大和座同人の一読を誘つてきました。今回の便りには明らかに大和座と、特に大和座の若い人たちへの励ましと読めるメッセージがあります。腐らず諦めず、ひたすら己が地平を耕し自らを鍛えて、来るべき時に備えなさいというお諭しに読めます。これが二〇〇六年の終わりに合わせて届けられたことに、得心の喜びとありがたさを感じております。私たちに吹き来る佳い風の一つと考えます。今年度六回の自主公演を、本日終えました。通してご来場のご支援を下さいました皆さま方へ、衷心より感謝を申し上げます。この一年、新しい人との出会い・清新な公演の場の頂戴・若い座員たちの順調な成長という幾つかの新面目も得て、大和座狂言事務所は無事生き残りまして。座員結束して、来年度への意欲は充溢しています。新春に又、大和座のホームシアターとなりました、「この「A&Hホール」でお目にかかれます事を心から念じております。」

(師走朔日)



安東 伸元(あんどどうのぶもと)

一九三五年大阪生まれ。一九六四年能楽協会入会、狂言方能楽師になる。茂山忠三郎家同門。一九八一年より教育機関へ出講。現在、羽衣国際大学名誉教授、大阪芸術大学・大阪府立東住吉高等学校・NHK大阪文化センターの非常勤講師。二年、重要無形文化財(能楽)保持者総合認定を受け、「日本能楽会」会員。「大和座狂言事務所」を主宰。

狂言を読む「福の神」

もろきゆう

近年、ブラジルでは次々と原生林を伐採して大豆畑を作っている。そこへアメリカの穀物メジャーが大豆を買い付け、各国へ輸出している。また、かつて大豆の輸出国であった中国が大豆の輸入国に転じたため、大豆の価格が高騰した。そこへようやく日本の商社も参入を図り、大豆の買い付けはアメリカ穀物メジャーと日本の商社、中国の商社の三つどもえとなってきた。ブラジルは高温多湿の気候で、アマゾンの広大な土地を持ち、低賃金での労働力がある。大豆の大量生産にはうってつけの地域といえよう。穀物メジャーや企業・商社はここに巨大な貯蔵庫を設置し、大量の大豆の買い付けを行っている。この動きはグローバルイズムの典型といえる。穀物メジャーはもとより、日本の商社も中国企業も大金を投ずることによって、大豆を確保し高値で売ることによって、利益を得るのだ。儲かったらそれでよいのである。もちろん、職にあぶれた人々に職を与え、大豆生産にもなう産業も生まれ、不況にあえぐブラジル経済に一筋の光明を与えてはいる。しかし、彼らに長期的な展望や、ブラジル国民の将来への考慮などは全くない。穀物の大量生

産が地域にどのような変化をもたらすかは周知の事実である。例えば飢餓にあえぐインドの救世主といわれた「緑の革命」がそうである。かつてフィリピンやメキシコ・インドの気候風土に適するよう品種改良された小麦を植え付け、大型機械を持ち込み地下水を大量に汲み上げて小麦の大量生産を行った。3年間は大収穫に世界中が喝采を送った。しかし、その農地は大量の水を汲み上げたことによる塩害と、化学肥料による土壌の劣化のため、草一本生えない土地になってしまった。しかし商社や穀物メジャーにとつてその国や都市がどうなるうともお構いなしである。また農薬を大量に使用していても、その食べ物を食べて即刻死にいたるといふことさえなければ、少々残留農薬があろうと、遺伝子操作による毒性があろうとお構いなしである。彼らは金さえ手に入ればそれでよいのである。そしてお金持ちになることで幸福を手に入れるのだ。つまり現グローバル社会においての幸福というのは、経済的に裕福になることだ。だからアメリカ穀物メジャーも日本や中国の商社も、いかにして安く穀物を手に入れ、高額で売って利益を手に入れるかという手段に走ってしまうのだ。

さてそれでは、室町時代のひとびとにとつての幸福とは何か。室町時代物語に究極の福を得る話で『大黒舞』という物語がある。

梗概は次のとおり「大和吉野の里に親孝行者の大悦の助が住んでいた。あるとき清水に参詣したおり、観音の霊験があり、藁しべを授かった。その藁しべは梨の実三つに換わり、梨は上臈にあげ、謝礼として絹二疋を頂き、絹は道ばたでたおれた馬一頭に換わり、それは黄金三枚に売れた。観音の霊験のおかげで有徳人となった大悦の助の邸宅に、福の神の大黒天が来訪し、数々の宝を授け、邪鬼払いの豆をまく。またそこへ恵比寿天も現れ、ともに酒宴をもよおす。二神は歌舞・俳諧・相撲の遊びを披露し、めでたさを寿(ことほ)いだ。そこへ大江山の盗賊や、悪霊が押し寄せるが、大黒天の活躍により、退散する。その奇特が朝廷にも聞こえ、やがて大悦の助は中納言の姫君と結婚し、男女五人の子に恵まれ、栄華を誇った。「物語の始まりは昔話の「わらしべ長者」の話と同類である。そして観音の霊験を受ける条件は親孝行である。親孝行を観音に認められ、夢でお告げを受け、そして次々と持ち物を高価なものに取り換え、黄金三枚になるのだ。しかし、物質的に裕福になるだけでは究極の福とは言えない。その後大黒天や恵比寿が裕福になった大悦の助の家に逗留し、邪鬼を払い、数々の宝をもたらす、大江山の盗賊をも追い払ってくれたのだ。その大黒天や恵比寿が大悦の助の家にやってきた日は節分だった。大

悦の助の家では節分の行事の準備でちょうど豆を俵から取り出していた。その夜、戸を荒々しく叩く音がする。大黒天は「けつしてこの戸開けてはならない。今宵は節変わりなので、鬼が来る夜だ。今、叩くのは鬼のようだ。」と言うので、戸の隙間より覗いて見れば鬼がいかめしい姿で立っている。恐れおののく人々に大黒は、「豆をよく炒つて、鬼は外、福は内と言って撒きなさい」と教えてくれる。その教えの通りすると鬼は目をふさぎ、「あら賢き人間のわざかな」とつぶやき、どこかへ逃げていつてしまった。この儀式はもともと平安時代に、宮中の年中行事としてあった「追儼（ついな）」の儀式である。追儼の儀式は大晦日の日、弓矢を使って邪鬼を払っていた。それが後の時代になって社寺や民間でも行われるようになったものだ。そして弓矢の代わりに豆を炒つて撒く風習は、室町時代からといわれている。『碧山日録』の応永二年（一三九五）十二月に焼き豆をまいて邪鬼を払ったとあるのが古い例である。また『塵添あい囊鈔』（一四四六年）巻三の六十一「節分夜打大豆事」には「節分の夜大豆を打事は。宇多天皇より始めり。鞍馬の奥僧正が谷、美曾路池の端の方丈の穴に住みける。藍婆惣主と云。二頭の鬼神共に出て。都へ乱れ入らんとしけるを。毘沙門御示現依りて、彼の寺の別当奏し申子

細あり。主上聞召す、明法道に宣旨ありて、七人の博士を集めて七七、四十九家の物を取て方丈の穴を封じ、塞いで三升三斗の豆を炒りて鬼の目を打たば、十六の眼を打ちつぶつて、抱えて帰るべし。」とあり、みぞろが池の伝説の鬼を打ち払うのに、炒り豆を打つて鬼の眼をつぶして追い払うという話だ。ここでは弓矢の代わりに豆を打つことで、邪鬼を払ったという伝説があることを記録している。それが節分の追儼の儀式に取り入れられ、庶民に流布したのかもしれない。ここで注目したいことは、一年間の邪鬼を季節の節目に払うことが幸福を招くと人々が信じていたことだ。

同様に室町時代の人々の幸福観を見る材料として狂言「福の神」がある。二人の参詣人が年の暮れに福殿に参り、豆を撒いているところに福の神が出現する。福の神は神酒を呑み、参詣人たちのために舞を舞つて寿ぎ、笑いながら去っていく。この参詣人たちが求めていることは、大晦日の日に一年の邪鬼を払い福を招くことである。二人は参詣の道中次のような会話をしている。「毎年、毎年歩みを運びますれば、次第次第に富貴になるようにござる」と一人が言う。もう一人は「だんだん楽しゅうなるようにござる」と返事をする。本来「楽し」とは「手（た）」を「のし」て舞うことから、今楽しいという満ち足りた気持ちのこ

とを言うが、中世ごろから物質的裕福さを表すようになったといわれる。だから福の神の「楽しゅうなりたいか」という問いに、「元手がほしい」と答えるのだ。「元手といえは、汝らは金銀米銭のことかと思つてあるうが、いっこうそうではない。汝らの心の持ちようのことじゃ。とてもものことに楽しゅうなるよう謡つて聞かそう」と福の神は祝言の謡を謡い、舞納めるのだ。福の神は、本来の楽しいは金銀米銭があることではなく、心の持ちようだと諭しているのだ。その福の神の祝言は「早起き、来客歓迎、夫婦円満、福の神に神酒を振舞え。」と日々日常を楽しく送り、神を信仰するところに幸福があるというのだ。

今年の大晦日には「福の神」を謡い、家族を大切にしているだろうか、毎日楽しく過ごしているか、国産の大豆をまいて邪鬼を払ってみよう。了



山田 師久(やまだ もろひさ)
大阪生まれ。本名・山田茂。一九八六年より安東伸元に師事。中世文学及び芸能を専攻研究。大和座狂言事務所の学術プレーン。月例輪讀会々の座長を務める。学問的指導の他、若いスタッフたちには人生問題の良き相談役として長兄的存在。高等学校国語科教諭。

声でつながるアジアの文化

～喉歌と日本の古典芸能～

森五六九(もりごろう)

アジアは「声」の文化でつながっている。仏教はインドからシルクロードを伝って日本にやってきた。中学校の教科書には「五三八年仏教伝来」とある。以来日本は仏教文化圏の国。その仏教儀式で歌われる声楽「聲明」は喉声であり日本は喉声文化の国である。西洋を中心としたキリスト教文化圏と比較するとあきらかにその違いが感じられる。安東の言う「西洋の天に昇る声・日本の地を這う声」である。以前より私は喉歌の代名詞的存在「ホーミー」に深く関心を寄せていた。「フーメイ」の名手である等々力政彦氏との出会いは、私の落語会にゲスト出演してくれていた津軽三味線奏者の久保比呂誌氏が客席に居た氏を紹介してくれたのがきっかけだった。「フーメイ」とはシベリアのトゥバ地方に伝わる喉歌。モンゴル地方に伝わる「ホーミー」によく似ている。ちょっと聞く分には同じ。発声の原理は同様といって差し支えないだろう。みんな「喉声」繋がり。

以前、私は「異物の交流」という異芸種交流の落語会？を定期的開催していた。

「フーメイ」の等々力氏の他、津軽三味線、アジアンパーカッション、のこぎり音楽、チューバ、ピアノカ、ブルース、シャンソン、パントマイム、舞踏家・・・実に多くの奏者、パフォーマーが入れ替わり参加してくれた。毎回何らかのコーポレーションをするというのがこの会の売りだった。全メンバーが一同に揃い「浪花コーポレ祭り」という催しを開いたこともある。「入り口遊びで出口は文化」がテーマだった。もう六年も前の話だ。最近では演者同士個々に会うことはあっても全員が顔を揃えることがない。各々が急激に忙しくなり海外で活動する者もいる。「シベリアを渡る風」(等々力政彦著・長征社)という書物を開くと彼についてのこんな紹介がある。「一九九九年度国立民俗学博物館特別共同利用研究員。研究テーマは『共生』と『トゥバ共和国の民俗音楽』。異なる生物、異なる文化同士が出会ったときに、新しい関係性が生まれてくる過程に興味があり、喉歌と雅楽など異分野の演奏者とのセッションも積極的に行う」子供の頃から好きだった八イマツという松を見たいという思いからシベリアトゥバ地方に入るようになり、その民俗音楽である喉歌「フーメイ」に出会っている。一九九八年には当地方で行われる国際フーメイシンポジウムにおけるフーメイコンテストで外国人初の総合二位に選ば

れている。そんな等々力政彦氏と異ジャンルのアーティストとのコラボレーションを狂言師として誰よりも早く実現してきた我が師安東伸元がいたからこそ今回この催しを実現できた。

二〇〇六年十月十九日。生野区にある府立桃谷高校定時制夜間部での「芸術観賞会」。当校での私の肩書きは特別非常勤講師。十代から七十代までの老若男女が在校している。大和座狂言事務所もここ数年毎年恒例のごとく出演している。今年のテーマは「アジアの声」。冒頭申し上げた「声」文化でつながるアジアを体感して、そこから日本文化にもつと関心を寄せてもらおうというのが今回の狙い。まずは落語で桂出丸「蝦蟇の油」、桂蝶六「豊竹屋」。前者は「大道芸」、後者は「浄瑠璃」をモチーフにした咄。続いて安東伸元、小田兆紀、金久蒼汲による狂言「呼声」。あえて「謡」がふんだんに入っている演し物を選んだ。そして等々力氏による歌と演奏。トシユブルールという楽器を片手にシベリア民俗音楽を披露。特に「フーメイ」という喉歌は生徒たちにかなりカルチャーショックを与えたらしく皆一様に固唾を飲んで聞き入っていた。締めくくりに「狂言謡」の演習。黒紋付と袴に衣装替えした安東がこの指導にあたる。例年行っているおかげか年々生徒たちの声も響くようになり頼もしい限り

だ。安東の招きで等々力氏もこれに参加した。「声」の印象に違いはあれど同じ「喉声」であるには違いない。等々力氏曰く、八百屋のおっちゃんなどが出す「らっしやい、らっしやい」の声を詰めていくと「フーメイ」の声になる。私の友人などはメールに「シベリアの音楽と日本の八百屋のおっちゃん繋がっていることに感動を覚えませんでした」と感想を寄せてきた。日本は喉声文化圏。シルクロードが日本に与えた影響は図り知れない。能狂言、歌舞伎、浄瑠璃、落語、講談、浪花節・・・日本の古典芸能はすべからずこの影響を受けている。私は改めて痛感した。

十年数年前、私はあるイベントプロデューサーと共同生活を送っていた。東京と大阪を頻繁に行き来していた頃だ。その彼が当時私にこんな事を言った。「川をきれいにしてうなんてスローガン掲げてもなかなか人は見向きもしない。だから、まず川に関心を持ってもらう事から始めよう」そんな思いが東京荒川区で行われた三百人ミュージカル「川と人と橋の物語」に繋がった。「ふるさときやらばん」という劇団が指導にあたり市民を中心におよそ三百人が舞台に立った。当日に全員が初顔合わせして、当日に台本を手にし、当日に役割を決め、当日に台詞や振り付けを覚え、当日に幕開けという荒業だった。勿論私もこれに参加。

観客も含む参加者の熱は異様に高まり、後にこれが河川敷での「荒川祭り」に発展している。市民の関心が明らかに川に向き始めた。結果、私の知る限りそれなりの効果を上げたと思う。やはり落としどころが肝心だが入り口も大切だ。「入口」と「出口」の思案がプランナーの仕事。「この国をよくしよう」というスローガンだけでは人が動かないのと同じ。ずいぶんとは話は逸れたが、今回の意図は「フーメイ」と「狂言」と「落語」の出会いからルーツや繋がりを感じ、日本文化や日本という国にもつと目を向けてもらえればというところ。また文化とはアイデンティティー（独自性）そのものである。「植民地支配の第一歩はまず相手国の文化の芽を摘む事から」と歴史も教えている。このままいくと日本がその模範的なモデルケースとして名を列ねる日も近い。（また話が逸れた）

桃谷高校は生野区という土地柄もあり在日の方も多く在籍する。彼らとの出会いからアイデンティティーというものを強く考えるようになった。それゆえ観賞会がただの観賞会に終わってはつまらないと思う。得た知識を元に何をどう思考するか。後日、事後学習を行い生徒たちに意見や感想を聞いてみたが私なりにいい企画だったと自負している。そして今また新たに企画構想を楽しんでいるところでもある。「稽古もお

るそかに・・・」というお叱りの声も飛んできそうだがこれが私の僻だから仕方がない。「真のインターナショナルは真のナショナルリズムから始まる」とどのつまりはこんなところに古典芸能の役割と責任があるのかも知れない。

2006年11月26日



森五六九(もりごらく)

大阪生まれ。落語名・桂蝶六。大蔵流狂言方安東伸元に師事。現在、放送芸術学院、大阪スクールオブミュージック専門学校、大阪シナリオ学校の各非常勤講師の他AECアーチストカレッジの落語教室及び大阪府立桃谷高校特別非常勤講師など、「高座」ならぬ「講座」も勤める。現代社会にあつて、好ましい芸能人の在り方を模索中。

「芸術の秋に何かを感じる」

小田兆紀

芸術の秋です。読書の秋ともいわれます。私もこの時期無性に本が読みたくなり本棚を物色する日が続きました。書いてある事は変わりませんがこちらに知識が増えたのでしょうか、買った当時とはまた違った印象を受け、それなりに有意義な時間を過ごすことができました。さてそんな中、これまでになく目を引いたのが安東先生と中野先生の共著「狂言画写の世界」です。狂言の解説や装束の着付け方など、我々は当然知っていて、実行出来なくてはならない事を、一般にもわかりやすい解説をつけて世に出した面白さを発見し、そして読んでいくにつれ何か作りたいと思うようになりました。これまで何度もこの本を読みましたが、今回作りたかったことありません。

今回作ったのは脚絆、胸込、腹込、胴帯、襦袢です。作っていて感じた事は、昔からその形として伝わっているものは、成るべくしてそうだったものだという事です。私ごとき少しかじった程度の知識を入れようとしてみてもまとまらず、かえっておかしなものになってしまうのだということ再認識しました。こうあらねばならないという

決まり事は何も無いとして、要は着た時に変な形にならないければ良いのですが、基本がなっていない人間はその違いすらわかりません。やみくもにそれらしいものを作ろうとしても結局どこかで破綻してうまくいくはずもなく、これは材料と時間の無駄です。唯一無駄でないと思える収穫はその失敗によつて得る事の出来る知識と経験でしょう。しかし、そのような理屈はそれを専門職にしている方達にお任せして、ただ無心に針を動かしたい、狂言に関係する物を作りたいと思う気持ちを大切に今回は一切の創意工夫はなし、基本に忠実に設計図通りに作成することにしました。

この作業の時間は昔先生が「何か色々悩み毎のある時、私はその事を考えながら物を作つて、騒ぐ心を鎮めていた。」とおっしゃっていたのを思い出しての事だったのかも知れません。物作りを嬉々として行っていた頃はそんな問題意識はなく、ただアツと言わせたいとか驚かせたいとかそんな低次元な気持ちだけでやっていたように思います。もちろん、それだけではない気持ちもありません。早く構造を知り、せめて装束のたたみ方くらい知って役に立ちたいと思つた。形から入る私の悪い癖ですが、一番初めに作った稽古袴は先生の普段着ている袴を模して作ったもので、胴着もそうです。先生のようになりたいとの願いを込め

て近付きたい一心で似せて作った物たちですが、そんなものを作ったからといって芸の本質に近付ける筈もなく今なおその背中は触れる事すらできない距離にあります。

今回の作業はある意味必然として自分が求めた行動だったのではなかったかと思えるのです。無心で作業をする数日間、色々あつた問題意識が整理されていったのを覚えていません。何故自分が狂言を志して芸術の道に入ったのか、どうして続けているのか、そして何を伝えたいのか…と答えのない問いかけを自分に対してしていました。自分に何が足りないのか、もっと上達するには、と久しぶりにゆっくり見つめなおす事が出来たひとときだったと思います。そして、前述しました「知りもしないで創意工夫をするとなかなか出来ぬ」という事実は裁縫だけに留まらず全ての事柄に当てはまるのだという事を身をもって知ることが出来ました。芸の背骨は師匠を模す、それが完全に出来た上で次のステップに歩まないは無茶苦茶なものになってしまうのだと再確認できただけで私の一連の時間は無駄ではなかったといえるでしょう。

もう一つ作業中に思ったことがあります。自分が子供狂言教室の子供達に言っていることがそのまま自身にも当てはまるということ。今年の子供狂言教室のお陰で随分成長させてもらいました。ですが、偉そ

うな理想ばかり言っていないか、言った以上自分はそれが出来ているか、またそうあるように心がけているか。実践の伴わない言葉はなんら説得力を持たない、そうならない為にも自分の言い放つた言葉に責任を持ち、そうありたいと願います。

今回も結局自分が使うものばかりですが、似せたい、近付きたいという気持ちとは全然違う別の気持ちで臨んだ時間だったように思います。いふなれば新生小田兆紀決意の表れ、と申しましょうか。自分との戦いに克つ為の武具の作成の時間だったように感じます。

さて、そんな決意を含んだ稽古用袴ですが、結果は大失敗。満を持して作り上げた袴は「柿山伏」の稽古中に畑主役の私に飛び乗った山伏役の金久君に「痛い！」と大不評。袴の背中板が鋭角過ぎた為脚に当たる為でした。その場に居合わせた諸兄皆々様の失笑を買う事態となりました。しかも、寸法が相変わらずあわないというなんとも情けないものとして世に生まれてしまいました…。腹込と胸込もそうです。自分の家紋と名前を入れた、結局先生の持つている物と同じようなデザインの物を作ったのですが、それを先生が見た時、「またこんなくだらないものを作って…他にやる事があるだろう」と顔と雰囲気では叱責を受けたような、そんな空気が流れました。まだまだ

試行錯誤が続きますが、これから何か思う事がある限り私の物作りは終わる事はないでしょう。そしていつになったら本質を見抜く目が私の身につくのか…。



小田 兆紀（おだ ちよつき）

一九七八年和歌山県新宮市生まれ。

本名・小田政明。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。大学の講義で安東の薫陶を受け、卒業後「大和座狂言事務所」に所属。二三年のイラン海外公演に参加。現在、橋本市こども狂言教室・富田林市こども狂言教室 講師。

「小舞の魅力」

金久蒼汲

能は主に謡と舞で物語が進行し、その重要性や表現方法から西欧のオペラやミュージカルと比較されることが多い。一方、狂言は対話を主体とする台詞劇といわれているが、「棒縛り」や「附子」など、劇中に謡や舞が採り入れられ演劇的効果をあげている点、また台詞の進行も「二字上がり三段起し」のテンポで終始音楽性を持って進んでいく点から考えると、狂言はそれ自体がメロディーを持った音楽であり、やはりオペラやミュージカルに拮抗する音楽劇であると言えるでしょう。演者はその狂言独特の音楽性を体得するための基礎訓練として、謡と舞を稽古する必要があります。

小舞は能の仕舞とは異なり、普段舞台ではあまり見ることのできない狂言の舞です。数名の地謡が舞台の奥へ並び、舞手は独りでその前へ出て扇子を広げ、謡の最初の一節を謡います。地謡が後に続き、舞手はそれに合わせて舞を舞います。能の一部分を舞う仕舞ほどの重厚感はないものの、祝言・祝う心・遊び心・恋心・弔う心・洛中洛外の風景などを、中世室町の時代に流行った歌謡や、能から抜粋した謡などで、情感豊かに多種多様に表現します。また小舞は文

字通り舞の小作品という意味で、短いもので一分、長いものでも四分程度のものが大半です。謡を稽古することの重要性については前号を参照していただくとして、演者は十分に音楽性を理解し、体得した謡を、今度は小舞という動きで表現していきます。舞台での基本的な姿勢や構え、足の運びや型の習得を始めとして、謡それぞれに応じた緩急や強弱、テンポや間などのグレードを習得していくのです。そうして謡それぞれを正確に謡い分けられ、小舞それぞれを的確に舞い分けられるようになることで、狂言の役柄を巧みに演じ分けられるようになるのです。

小舞には言葉がありません。無いわけではないのですが、舞手が言葉を発するのは謡の最初の一節のみで、あとは地謡に合わせ、自分の身体と扇ひとつで表現しなければなりません。私たちが意志を伝達するのに最も簡単な手段は言葉です。伝えたいことを口にするだけで意志が伝わるのですから、これほど有効な手段はありません。ですが、こんな経験はないでしょうか。同じ言葉でも、言う人によって印象が異なる。また同じ人の同じ言葉でも、その時の態度や仕草によって意味合いが変わる。これらの例えは、言葉が一〇〇%意志を伝達し得る手段ではないことを表しているのではないのでしょうか。「皮肉」に至っては、言葉

は本来の意味とは正反対の意味になつてしまつたのですから、言葉の持つ有効性は低く、むしろ言葉以外の仕草や態度、目線や表情といった身体表現による有効性の方が高いと言つても過言ではないと思います。言葉を軽んじると言っているわけではありません。言葉はそれ以外の要素によって如何様にも変化するため、言葉を正確に伝達するため、その状況や相手に合わせた身体表現を心掛けたいと言いたいのです。舞台で演技をするという行為は、この言葉と身体表現の密接な関係を感じる最たるものです。言葉と身体がちぐはぐでは、いくら台詞が巧くても、いくら所作が美しくても、その効果は期待できません。明瞭な台詞に的確な所作がついてこそ、演技は説得力を持つのです。狂言は音楽劇であると言つ以上、台詞は勿論、所作や仕草に至るまで、その演目の持つメロディーを崩すことなく演じる必要があると思います。なにもミュージカルのように、リズムに合わせて無理矢理オーバークションをしると言っているわけではありません。小舞と同じように、狂言の演目にはそれぞれグレードがあり、メロディーがあり、役柄があるのだから、単に動くのではなく、それらを意識して的確に表現するべきだと言いたいのです。観ていて気持ちの良い狂言とは、台詞は謡つように、謡は語るように、動きは舞つように感じるも

のです。小舞を稽古するということには、それに近づくための具体的な要素がぎっしりと詰まっているのです。



金久蒼汲(かねひさそうきゅう)
一九七八年広島県呉市生まれ。

本名・金久寛章。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。小田とは同期。同じく安東に師事して稽古に通い卒業後、「大和座狂言事務所」に所属。演劇人としての肉体訓練の重要性を自覚して日々精進を怠らない律儀さを持っている。二、三年、イラン公演で処女海外旅行を果たす。二、四年インドネシア公演旅行に参加。現在、橋本市こども狂言教室・富田林市こども狂言教室 講師。

「意思と感動」

原 斗轟

近年のクラシックブームの影響で色々な場面でクラシック音楽を耳にする機会が増えてきました。私はクラシック音楽の類には高校時代に授業で聞いて以来縁がなく、興味も無かったのですが、何かのタイアップで使われていたラフマニノフと言う有名な作曲家のピアノ協奏曲第2番のメロディーが頭の中に残ってしまい、しつかりと聴いてみる事にしました。このピアノ協奏曲第2番という曲は作曲者のラフマニノフが重い精神病から立ち直った後初めて作曲した曲なのだそうです。絶望を表現しているかのような重いピアノ演奏で始まりオーケストラの演奏がそれを追いかけます。永遠に続くかの様な重い旋律は氷が溶け出す時の様に徐々に明るさを取り戻します。そしてパツと弾け飛び力強くやさしい演奏に変わり、それは生きる喜びを表現しているようで誰の心にもある暗い部分と楽しくありたいと思う明るい部分とが表現されているように思えて、私は心を強く揺さぶられました。

しかしクラシック音楽を良いと感じれば感じるほど、私の心にはある戸惑いが生まれ始めました。実はピアノ協奏曲第2番に沸きあがった感動を日本の古典芸能には感

じたことがないのです。なぜクラシック音楽に覚えた感動を古典芸能に感じないのか、また古典芸能に携わるものとして有るまじき事なのではないのかと思いました。現代人は西洋文化が生活の基盤になっているため日本的な文化を良いと感じる素養に欠けていると言われるように、私にもそのような素養が欠けているだけなのでしょうか。もしその通りならば日本的な素養を育ていかなければなりません。ですがどうにも私の心が震えた事はそれだけの問題ではないようなのです。

ここで、演奏または演じるといった表現者からの視点でみてみますと、うっすらではありますが、その答えが見えてきます。クラシック音楽のみならず、世界中で愛されている音楽の多くは、曲に込められたメッセージを観客に伝えると言つて演奏されており、それが観客に衝撃や感動を伝えるだと思えます。直接心に突き刺さるような演奏であったり、何かを想像させるような演奏であったり、譜面通りで正確な演奏であっても、その中に演奏者のプラスの感動する仕掛けがあるように感じられます。しかし近年の日本で聞く音楽の多くはそれらのプラスを伝える事が希薄になってきていると思えます。先日、日本の古典が好きで教育テレビ等の番組をよく見ていると仰る方とお話する機会がありました。その

方に古典のどのようなところが好きなのですかと尋ねたところ、日本の古典は様式美だからそれが好きなのだと答えられました。この方が言うように古典は様式的で形の美しさが印象的です。ですがその内容は印象に残らなかつたのでしょうか。日本の古典には重々しく格調高いといった様式美の要素ばかり引立てられ、肝心の中身がごっそり抜け落ちてはいないでしょうか。「そんなことはない、見る人が見ればわかる」と言われる方もいるかもしれませんが、それでは全く意味がないのです。

クラシック音楽に感動を覚えて以来、私はどのように謡いを謡えば、それらに込められたメッセージが観客に伝わるのかと考えて来ました。決められた旋律を正確に謡う事は何百年もかけて研鑽されてきた美しさを表現するには踏み外してはいけない絶対条件です。ですが、形ばかりでは歌詞や旋律に秘められたメッセージが伝わらないのです。日本の古典はそのようなところで迷走していると思います。そのためにも古典と真剣に向き合い、伝える事に没頭しなくてははいけません。曖昧な答えしか出ていませんが、このモヤモヤとしたものを感じ取りと形にして皆様にお伝えできるように、自分自身を高めて行きたいと思えます。



原斗轟(はら とくこう)

一九八一年 福岡県久留米市生まれ。

本名・原裕之。大阪芸術大学舞台芸術学科卒業。在学中に狂言と出会い多大な触発を受け、学外公演「狂言デビュー」において四回の狂言出演を果たす。

大和座狂言事務所関連

催しのお知らせ

2007年(平成一九年)度

一月

六日【土】午後六時三〇分 長岡京市立中央公民館

『新春狂言』

「佐渡狐」 茂山忠三郎・善竹忠重・安東伸元

「寝音曲」 茂山千三郎・善竹忠亮

「禰宣山伏」 茂山良暢・茂山茂・山口耕道

榎谷雄一郎

入場料 二、〇〇〇円(全自由席)

問い合わせノ(財)長岡京記念文化事業団

〇七五―九五五―五七二

二十日【土】 午後十一時 京都観世会館

『京都観世堂書』 第一五〇回会

能 「高砂」 味方玄・原 大・安東伸元 他

狂言「佐渡狐」 茂山忠三郎・茂山良暢

能 「千手」 河村晴久・谷田宗二朗 他

能 「大会」 大江信行・福王和幸・善竹忠重 他

入場料 四、〇〇〇円

二、〇〇〇円(学生)

お問い合わせノ〇七五―七七一―六一四

二十一日【日】午後十時 堺能楽会館
二〇〇六年度学外公演

『大阪芸術大学・舞台芸術学科 狂言之会』

「室町心を謡う」一回生

「二回生による狂言・小舞十番」

入場歓迎

お問い合わせ／大阪芸術大学 舞台芸術学科

〇七二一九三三七八一

二十七日【土】午前二時 二森画廊

『中筋喜春能面展』 関連催し

一 老女面とあそぶ 対談ほか

ご来場歓迎

お問い合わせ／〇六一六三三〇一〇六五六

一月

三日【土】午後二時 「浜屋敷」

『狂言をあそぼう』

《自律を望み、反抗する冠者たち》

講話「太郎冠者とは何者」 山田師久

公狂言「呼声」 安東伸元・金久蒼汲・中西煌笙

開歌唱演習「雛子物の謡」 安東伸元

狂言「清水」 山田師久・小田兆紀

入場料 一、五〇〇円（先着90名）

お問い合わせ／〇六一四八六〇一九七三二

吹田歴史文化まちづくり協会「浜屋敷」

四日【日】午後一時 橋本市教育文化会館

『第一六回紀ノ川市民狂言会』

「一部」橋本狂言を楽しむ会による狂言

「二部」演習講話と女物狂言二番

「金藤左衛門」 小田兆紀・山田師久・寺西将愼

「鈍太郎」 安東伸元・金久蒼汲・井上放雲

小田兆紀

入場 無料（整理券必要）

お問い合わせ／「橋本地区公民館」

〇七三六一三四一二七五〇

十一日【祝】午前十一時始

会場 山本能楽堂

中央区徳井町一―三二六

〇六一六九三四一九四五四

室町の笑いをお届けする狂言パフォーマンス

「艸言会」 狂言発表会

「ご来場歓迎」

安東伸元が主宰する「艸言会」による

狂言会で、毎年 多数の狂言愛好者の

「ご来場を得て賑やかに新春を寿ぐ。狂

言歌謡の歌唱演習に始まり、狂言・小

舞を十数番上演します。

主宰 艸言会

協賛 NHK大阪文化センター

協力 大和座狂言事務所

予告

二〇〇七年二月二十四日【土】

午後二時

千里中央「A&Hホール」

豊中市新千里東町一―五―三

千里朝日阪急ビル4F

古典伝統芸能と出会つひととき その四十五

新シリーズ 真の古典力

鷺流狂言を復元する

《寝代り》 ねがわり

典拠／関大本「鷺畔翁狂言台本」

校正／関屋俊彦（関西大学教授）

演出／安東伸元（大和座狂言事務所）

出家 安東伸元

檀家の後家 山田師久

太郎冠者 関屋俊彦

《柿山伏》 かきやまがし

山伏 金久蒼汲

畑主 小田兆紀

講話「鷺流狂言について」 関屋俊彦

歌唱指導「新春に謡う」 安東伸元

入場料 会員／一、二〇〇円

一般／一、五〇〇円

お問い合わせ 「A&Hホール」

〇六一六八七三二―二六〇七

出版物の紹介

万葉解き語りCD

『万葉のまど』

神戸大学名誉教授 山崎 馨 著・朗読

古代日本語の在り方について詳細な研究を重ねられた山崎馨・神戸大学名誉教授がやさしく解き語る万葉講座です。平易で親しみのある表現によって、万葉のすぐれた世界、豊かな心がひとつひとつ解き明かされてゆきます。シンセサイザーの美しい調べにのって語られるこの講座は、これから万葉集を勉強しようとする人にも、もっと万葉の世界に浸りたい人にも、永遠に秘蔵できる一品になると思います。

販売元 図書出版「和泉書院」

〒106-6771 一四六七

定価 九 四五〇円(税込)

商品内容 CD六枚・解説冊子「万葉のまど」・万葉の館」・化粧箱入

- 第一章 自然をとらえる感性
 - 第二章 ゆたかな心・思いやりの心
 - 第三章 自然の中に融ける
 - 第四章 日本語の美しさ・おもしろさ
 - 第五章 山河はるかに
- 付録 万葉集概説

発行者 六稜出版者

出版者 万葉に親しむ会

世話役/邑上治兵衛

編集後記

この間、善竹弥五郎師の事をお尋ねになる人があり、いろいろ資料を探していますと当然の事ながら吉田清三さんの名も目に映り、懐かしくそれらを読んでおりました。弥五郎は稀代の名人と言われ、武智鉄二によつて東京へ紹介された弥五郎の芸が、現代演劇の俳優たちに驚嘆の衝撃を与えました。この弥五郎の芸は、吉田清三という相手役を得て花開き、元々素人弟子であった吉田清三は弥五郎という師を得て、玄人の域にまで芸を昇華させたという、ある評論家のお説があります。私は、この評論は正しいと思います。

私が三十代の頃、この吉田清三師から知遇を受けました。知遇は清三師没後も続き、未亡人から生前愛蔵された装束・武悪面と共に、狂言台本・能アイ書付の遺贈を受けました。これらの品々によつて、どれほど私に力付けられたか知れませんが、

師走の始め故清三夫人、吉田ます様の訃報を受けました。文面に「九月十二日に、百二歳にて天寿を全ういたしました」とありました。まさに天寿まで見事に生きられたと思えます。晩年盲目になられた清三翁に付き添って能楽堂へ足を運ばれたお姿を思い出します。大和座をご支援下さるお便りも沢山頂きました。感謝の念を込め、ご

冥福をお祈り申しあげたいと思います。

毎年末の決まり文句ながら、いよいよ一年の経過が速く感じられます。これには、加齢による気持ちの焦りが大いに作用していると思われまます。

来年度も年六回の自主公演と、それに伴った「大和座通信」の発行を続けて参ります。年中のご厚情に感謝し、来る新年が皆さまにとつて佳き日々であることを念じます。

(伸)

大和座狂言事務所

発行日 二〇〇六年十二月十四日
編者 尾野早織
発行者 安東伸元

代表 安東伸元

〒五五五-〇八四一

吹田市千里山東二丁目3の3

TEL 06(6384)5016

FAX 06(6384)0870

http://homepage3.nifty.com/yamatoza
e-mail: BYX04535@nifty.ne.jp